

# ソーシャル・サポートの尺度を用いた分析の試み - 別科から進学した中国系留学生を対象として -

徳永あかね

## 1. はじめに

今日における留学生政策路線の出発は1983年に遡る。この年、中曽根首相が打ち出した「21世紀への留学生政策懇談会」において留学生問題が今後の日本の文教政策、対外政策の中心とすべき重要国策の一つとして位置づけられ、21世紀初頭までに留学生受け入れを10万人に拡大する、という提言がなされた。この目標は2003年に達し、その後も増加の一途をたどっている<sup>1</sup>。しかしながら、言葉の問題をはじめ、金銭的な援助、住宅問題、同伴家族の教育問題など、受け入れ後の支援策については再三遅れが指摘されてきた<sup>2</sup>。これに加え、日本社会の異文化に対する理解不足から招く問題も少なくない。

一方、本学においても2000年9月の留学生別科開設後、その半年後には学部での本格的な留学生受け入れが始まり、また短期留学プログラム等で来日する留学生も含め、在籍人数は毎年増え続けている。その種類は大学予備教育として位置づけられる留学生別科（以下「別科」と記す）で学ぶ世界10数カ国出身の100余名の留学生、学部で学ぶ中国を中心とした約100名の留学生に大別される。こうした異なる背景や所属を含む留学生全体に視点をおいた支援体制構築の試みは、ファン・堀内・徳永（2004）や本報告書の他論文において論じられている。本研究では、これら主要な支援体制から少し視点はずし、日常生活を背景とした支援の実態について「ソーシャル・サポート（social support）」の概念からアプローチを試みる。具体的な方法としては、別科から学部へ進学した8名の中国系留学生への調査用紙とインタビューを基にした質的なデータを周（1993a）で提案されたソーシャル・サポートの尺度を用いて分析し、今後の本学におけるソーシャル・サポート的アプローチによる支援の第一歩としたい。

## 2. 研究の背景

### 2.1 「ソーシャル・サポート」の定義

ソーシャル・サポートの研究は現在、社会心理学領域で多く行われているが、もとは医療分野で健康と環境との関係に着目した研究に端を発する<sup>3</sup>。米国の疫学者で、医者でもあるキャッセルの研究（Cassel, 1972）や地域精神医学者であるキャプランの研究（Caplan, 1974）がその始まりともいえる。キャッセルの視点は日常の環境と病気との因果関係に注目したもので「同じ環境条件のもとにいても病気になる人とならない人がいることの要因に他者との結びつきの強さが人によって異なることを主張した（浦1992, 11頁）。

<sup>1</sup> 2004年度は約11万7千人。

<sup>2</sup> 例えば朝日新聞2005年2月28日から3月3日までの特集記事「21世紀の留学生戦略」においても同様の指摘がある。

<sup>3</sup> ソーシャル・サポート研究の定義や来歴については浦（1992）、木村（1997）に詳しい。

一方、キャブランの研究では支援システムの構築に注目し、サポートシステムをいくつかの段階からなるものとしてとらえた。その際、援助を求めている人を弱者と見なすのではなく、その人の持てる潜在的な力を最大限引き出すように情緒的に支えることでその効果を発揮するものとして、専門家によるものばかりでなく、非専門家によるものも必要とする考えであった（浦 1992、14 頁）。そして、インフォーマルなソーシャル・サポートを個人に提供するものとして、家族や友人、個人や集団によって構成されるネットワークという概念を含めた（木村 1997、34 頁）。

ソーシャル・サポートが異文化適応で果たす役割の重要性については木村(1997)や田中(2000)などの具体的な研究も行われている。田中はソーシャル・サポートを授受と周囲の関係とに視点を置き、ソーシャル・サポート・ネットワーク形成と適応の関係について報告している。留学生に対する「支援（サポート）」では奨学金制度やチューター制度などの内容や手続きを明らかにし、必要な人がサポートへアクセス出来るよう、またそのサポート自体にも安定性を持たせるよう、制度化されることが必要である。これに対し、ソーシャル・サポートとはある形が形成されたサポートではなく、言わば日常における人間同士の係わり合いのなかで生じる小さなサポートの集積とも説明できる。健康的な留学生生活を保障し、日々の生活のなかで自らの力で問題解決できるような力を育むために大きな役割を果たすものと言える。

## 2.2 中国系留学生へのソーシャル・サポート研究

中国系留学生に関して、ソーシャル・サポートへの意識を分析した周(1992, 1993a, 1993b)の一連の研究がある。周(1993a)ではソーシャル・サポートを領域とタイプという2元的な構造を持つものとし、先行研究で複数の研究者たちによって模索されてきた尺度の項目を基に最終的に以下に引用する4領域、4タイプに分類した。さらに4領域×4タイプの16条件それぞれについて、国立大学に所属する中国系留学生23名を対象に学生たちが必要としているサポート、受け取っているサポートを個別面接法によって調査し、在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度を作成した。

### ソーシャル・サポートの領域 周(1993a、236 頁)より

#### 研究領域：

授業、発表、試験、勉強、研究などについてのサポート

#### 人間関係領域：

人との付き合い、自分の意見や態度の伝達、人とのコミュニケーションなどについてのサポート

#### 情緒領域：

怒り、悲しみ、悩み、いらいらといった不快な感情が生じたときのサポート。

#### 環境・文化領域：

日常生活、生活費、食べ物、言語、文化、風俗、習慣、価値観などについてのサポート。

## ソーシャル・サポートの種類 周(1993a、237 頁)より

### 物質的タイプ：

金銭や物を貸してくれるといった物質的なサポートや困ったときに手伝ってくれるといった労力的なサポート。

### 心理的タイプ：

悩みを共に考えてくれて、理解を示してくれたり、個人を受容し、肯定し、評価してくれるような精神的、感情的なサポート。

### 指導的タイプ：

指示、提案、助言などの客観的、理性的なサポート。

### 情動的タイプ：

情報の提供とか、連絡や伝言をしてくれるといったサポート。

この尺度を用いて分析した場合、同じ中国系留学生を対象者としてもその所属（例：学部生、院生の別）や研究領域（例：理系、文系の別、専攻の別）、環境（例：国立・私立の別、大学の規模）によってどの領域、タイプ別のサポートの量、種類が異なることが予想される。そして、その差異こそがある対象と別の対象との違いを特徴づけるものであると言い換えられよう。

例えば本学が抱える留学生を対象に尺度を用いた場合、別科か学部かの違い、同じ学部の中なかでも全体の 80%近くを占める中国系か否か、など集団が持つ背景によってソーシャル・サポートの差異が見られるに違いない。本研究では「別科から入学し、学部へ進学した中国系出身」という背景を持った学生を対象として周（1993a）の尺度で分析する。そしてここで得られる結果を、将来、別科と学部の別、あるいは中国系と非中国系の別などのさらに広範囲での調査を行う際に比較対照とする基礎資料としたい。

## 3. 対象データと調査の手続き

### 3.1 調査協力者

本学別科から学部へ進学した中国系留学生 8 名（男性 2、女性 6）へ研究の概要と調査の目的を説明し、記述調査とインタビュー調査への協力を依頼した。

〔年齢〕 26～30 歳

〔性別〕 男性 2 名、女性 6 名

〔在日期間〕 1 年半～3 年

〔学年〕 大学 1 年生 6 名、2 年生 2 名

〔母語〕 中国語 6 名、中国語・朝鮮語 2 名

### 3.2 調査の種類

#### (1) 記述調査

インタビューに先駆けて調査用紙（稿末の資料参照）の記入を依頼した。項目は以下に記す 3 項目から成る。

#### 「1. 過去 1 ヶ月間に連絡をとった相手とその連絡方法」

この項目では過去 1 ヶ月に連絡をとった人 5 名を挙げてもらった。プライバシーに配慮し、名前ではなく任意の記号を付し、男女の区別についても記載は義務付けなかった。対

面、メール、電話など、各相手とのコミュニケーション手段についての記述も求めた。

#### 「2. コミュニケーションの必要性を感じる相手」

この項目では母国の友人、同じ国出身の留学生、他国の留学生などの項目をあげ、必要（または重要）だと感じる順に1から番号を付させた。必要でない場合には番号をつけなくても良いと指示した。

#### 「3. 別科から学部へ移ったことによるコミュニケーションの変化」

この項目では新規の出会い、クラスメート、教師、職員との関係について個々に答えてもらった。これは別科から学部へ進学することによる変化を見るための項目である。上記1, 2を補足するものとして設けた。

以上の3項目について調査用紙に書かれた内容を、Microsoft 社 Excel で集計表を作成し、**分析資料1**とした。

#### (2) インタビュー調査

上記(1)の調査用紙に記載された内容を基に一人あたり1時間前後の半構造的インタビューを行った。インタビューはすべて文字化され、**分析資料2**とした。

#### 3.3. 分析方法

**分析資料1**より今回の調査学生たちの日常的なコミュニケーション相手とその相手から得られるサポートを抽出した。さらに**分析資料2**より、具体的なサポート内容を拾い出した。これをもとに周(1993a)で考案された4領域×4タイプの尺度表に記入し、一覧表(表1)を作成した。また、**分析資料2**を中心に各サポートの背景となる考えについて質的な分析を試みた。

### 4. 分析結果と考察

#### 4.1 領域別ソーシャル・サポートに見る特徴

ここでは周(1993a)の尺度を用いた表1より、4つの領域、「研究・学習」「人間関係」「情緒」「環境・文化」を軸にして分析する。周の研究でも実際のサポートが少数の項目に偏ることが報告されているが、言い換えればこうした偏りがその集団の特徴を現わしているといえる。本研究で調査した8名から得られたデータを分類すると、「環境・文化領域」のサポートが一番多く、「情緒領域」がこれに続く。「研究・学習領域」と「人間関係領域」についてのサポートは少数であった。また、個々のサポートの内容を概観する限り、8名はいずれも自覚された解決困難な問題には直面しておらず、問題解決的なサポートよりも安定した留学生生活を維持する上でのサポートを多く受けていることがわかる。以下に各領域別にサポートの特徴とその背景について分析を試みる。

まず、「研究・学習領域」において心理的サポートが見られないことから、対象者の学年と本学の授業カリキュラムや履修に関して、現在のところは精神的なプレッシャーを生むものではないと予想される。これは、入学して半年から1年の学生が調査対象であることの影響も考えられよう。さらに、別科から学部へ進学した対象者の場合には、レポートを書くのに必要な資料がどこで入手可能か、あるいはPC教室、学内外の図書館など必要な施設へのアクセスに慣れており、余計なプレッシャーから解放されていることも理由として挙げられる。一方で学外から学部へ入学してきた学生の場合には、物理的な学習支援サポ

表1. ソーシャル・サポートの領域とタイプ (神田外語大学学部中国系留学生)

	研究・学習領域	人間関係領域	情緒領域	環境・文化領域
物質的 タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試験前、必要な本を貸してくれる。(同国のクラスメート、同国の先輩留学生)</li> </ul>			
心理的 タイプ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人との付き合いなどで納得が出来ないことがあったとき、話す(同国のクラスメート)</li> <li>・日本人の反応がよく理解できなかったとき、話す(日本に長く滞在している同国社会人、母国の友人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本人の優しさを教えてくれた(元のチューター)</li> <li>・大人数の授業で気持ち的な安心感(同じ授業を受けている留学生)</li> <li>・困ったことがあったとき、相談にのってくれる(同居の他大学留学生)</li> <li>・つらい時など、お喋りすると楽しい(バイト先の日本人)</li> <li>・感情的な悩み(母国の友人)</li> <li>・経済的な心配(授業料のことなど)がわかっていてもお互いに口に出さずに励ましてくれる(同国、他国の留学生)</li> <li>・連絡を取り合うことで気持ちの上で安心できる(同国の留学生)</li> <li>・挨拶をするだけの知り合いでもたくさんいた方が自分の存在が確かめられる(学内の学生)</li> </ul>	
指導的 タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の内容でわからないことがあったとき(日本人学生)</li> <li>・日本語でわからないことがあったとき(日本語の教員)</li> <li>・コンピュータ授業で操作がわからないとき(コンピュータ科目の教員)</li> <li>・レポートを書く時の日本語、書き方(チューター)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の悪い点を率直に指摘してくれる(同国の親友)。</li> <li>・日本人との付き合い方で悩んだり、何か問題が起こったとき(自分より滞在年数が長い同国友人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困ったことや悩みがあるとき、相談にのつくれる。(卒業した親友日本人学生)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活で何かトラブルが起きた(大学国際交流課、日本人の年配の知人)</li> <li>・卒業後の進路など(教員)</li> <li>・卒業後に必要な英語力(別科欧米系留学生)</li> <li>・将来の就職に必要なこと(バイト先に客として来る社会人)</li> <li>・就職した後に必要な日本語や知識(バイト先に客として来る社会人)</li> <li>・日本人なら誰でも知っている常識、有名人など(滞在年数が長い同国日本人)</li> </ul>
情動的 タイプ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・履修に関する情報(先輩留学生)</li> <li>・出席できなかった授業の内容(同国のクラスメート)</li> <li>・宿題についての情報(クラスメート、担当教員)</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生に必要な情報(先輩、同輩の留学生)</li> <li>・卒業後の就職先についての情報(大学、バイト先で一緒にフリーター)</li> <li>・就職やそれに向けて知っておいたほうがいい日本の社会のこと(日本人社会人)</li> <li>・今の会社の情報、状態や就職情報(同国の社会人先輩)</li> <li>・日本人の考え方や認識の仕方について知る(バイト先の日本人)</li> <li>・自分を高めるための他国の情報(他国からの留学生)</li> <li>・話題を広げるために必要な日本の様々な知識(日本に長く滞在している同国留学生)</li> <li>・具体的に目指す目標、モデルとなるもの(日本で成功している同国社会人)</li> <li>・日本人がしているファッション情報(クラスやバイト先の日本人、同国のクラスメート)</li> </ul>

ートへのアクセス方法を知らず、十分使いこなすことが出来ないため、出された課題一つ一つに対して余分な時間がかかることも予想できる。この領域に関しては、留学生の学年や大学への在籍期間によってどのような差異が生じるのかを見ることで同じ支援が準備されていても環境への順応段階によって活用に差が見られることが予測される。

「人間関係領域」では、主に留学生の受け入れ国である「対日本人」との異文化摩擦から来る問題への対処方法について、話を聞いてくれたりアドバイスをしてくれるという種類のサポートを受けている。この領域のサポートに関しては別の項で述べるが、同国人が果たす役割が大きかった。このことは同国人が多数いる国の学生と少数あるいは全くいない国の学生とでサポートの種類や量に差異が見られることが予想される。同国人がいない場合にはこの領域のサポートはどこから得るのか、あるいは量やタイプに違いが見られることが予想される。

「情緒領域」では心理的タイプのサポートが目立つ。ここには同国の留学生以外にチューターとして知り合った一般学生やアルバイト先の日本人も含まれる。特定の人物からのサポートが多いが、そのなかには同学年の一般学生は含まれていない。今回調査対象としたのは別科から学部へ進学した学生たちで、同じ学年の学生たちが入学する以前から学内でのネットワークを構築していたことになる。継続的な関係がこの領域でのサポートと関係することが予想される。この点について、今回対象とした学生が1年、2年を経過するなかで同学年のなかにも継続的な関係を構築でき、この領域でのサポートを得る相手も出てくることが考えられる。

最後に「環境・文化領域」については、サポートのタイプとして指導的なものと情動的なものとして占められ、個々のサポートの内容を見ると、学外の人物からそのサポートを得ているものが目立つ。つまり、本学の留学生は現状だけでなく、将来の生活環境に関するサポートに関心が高いこと、具体的には日本社会に関すること、就職に必要な知識や情報、学外の社会の様子などに関して情動的タイプのサポートを必要としていることを示していると言えよう。

#### 4.2 学内で受けるソーシャル・サポート

ここでは、本学の環境で実際に誰からどのようなサポートを受けているのか、[分析資料2](#)を中心に分析を進める。

##### 4.2.1 クラスメート（留学生）

日本における留学生のネットワーク形成を分析した横田・田中（1992）はアジア出身者では同国人との結びつきが強いと分析している。今回対象とした学生たちも同様に留学生仲間のうち、特に同国人クラスメートとの結びつきの強さが見られた。日常生活でよくコミュニケーションを取る相手として全員に気の合う同国人留学生が含まれており、彼らとの出会いは学部入学後、同じ授業で顔を合わせるようになったことに始まる。学部在籍の留学生数<sup>4</sup>は2004年12月現在、1年生から4年生までの合計98名のうち78名までが中国系留学生で占められている。従って本学の中国系留学生の場合、特に同国人のクラスメー

<sup>4</sup> 本報告書第 部の「1. 留学生受け入れの現状」表1「2004年12月現在在学中留学生数」より参照。

トと接触する機会が多いことがわかる。ここでは、同国人留学生も含めた留学生同士で得られるサポート、留学生のなかでも同国人留学生同士から得られるサポートの二段階に分けて分析する。

まず、「留学生同士」ということはどのような集団意識があるのだろうか。来日するまではそれぞれの母国に気の合う友人たちがおり、頻繁に連絡をとっていた。来日直後には母国の友人への連絡は維持されるが、日本での滞在日数が過ぎるに従って、次第に距離感が感じられるようになってくる。その原因として挙げられるのが共通する話題の減少である（下線 ~ ）。

<留学生 D>

来たばかり、半年ぐらいはよく連絡とっていたけど半年を過ぎてからは考え方が違うと感じて。向こうの友達に電話をして、懐かしいから電話をするけど話の内容が全然違うから。(家族とは)自分の家族の話をするから(違わない)、国の友達に比べたら今の友達の方が、大体同じだし。

<留学生 A>

例えば自分は今、日本にいるから、多分、感情的な悩みがあったら、精神的な悩みがあったら向こうの友人たちと相談できるけど、でも現実の、仕事とか勉強とか困っていることがあったら、向こうの友人たちは助けようと思ってもできないですよ。こっちは全部知らないから。

こうした母国の友人とは対照的に、コミュニケーションが密になっていくのが日々の授業で顔を合わせる機会が多い留学生同士である。特に1,2年生のうちには日本語や英語など語学は留学生だけの少人数で授業が行われる。ここでお互いに顔をあわせたり、語学の練習等で話す機会も増え、共通の話題も増えていく。また単純に話題が共有されるだけでなく、母国を離れ、以前よりも経済的に不安定な境遇を共有していることも大きい(下線)。そのなかで自分と似たような境遇の友人が近くにいること自体もソーシャル・サポートとなっていることが考えられる。一方、同じ学年の一般学生とは大教室の大人数で受ける授業で同席することが多く、授業外では学期末に誰かの発案でなされた『飲み会』で同席して話し、顔見知りが出来ることが、留学生ほど距離感が近くなっている様子は伺えない。なお、一般学生との距離感とサポートについては次項で分析する。

<留学生 D>

みんなここに来てバイトしながら結構疲れていて、なるべく疲れたとかの話を避けて、元気になる話をするんです。授業の話をしたり、バイトはどうとか聞くけど、授業料はどうしようとかの話をなるべくしないようにしてる。・・・お互い感じるんですよ。みんな頑張っているんですけど、頑張っているんですけど授業料はやっぱ心配で、バイトをもっと頑張ろうって話をしたり、休んだらもうちょっとバイトをした方がいいんじゃないってアドバイスをしたりとか。

次に、留学生のなかでも「同国人」留学生はどのような存在であるのかについて見る。今回のデータを見る限りでは、文化的な共通点というよりは「母語で話ができる」という要因がより大きいようである。学部へ入学した留学生たちは一定以上の日本語力があるとは言え、母語で話すことと比べると理解できる日本語にも限りがある。ともすると、日本語の限界から話題についていけなかったり、お喋りを心から楽しむことが出来ない。一方、母国語であれば理解できない話題に移っても、どこかで修復の機会を設けることが出来ると考えている（下線）。また、母国語だけ、あるいは日本語だけで表現可能なことも多い。そうした時に言い換えに労することなく、母国語、日本語を混ぜて自由自在に話が出来ることが同国人留学生とは可能となる（下線）。日常の話題の共有、言語の共有の2点を併せ持つ同国人留学生は、他に代替が難しい日常のサポートであるようだ。

<留学生F>

学校の友達も中国人の友達と日本人の友達しかいけませんので、中国人の友達ともっと話しやすい。日本人の友達とやっぱり今、日本語は普通でしゃべれるけどそんなに特別なことに関しては、または今の日本の他のことだとか、学校に関係ないことに行っちゃうと、まだ自分の日本語が足りないという感じで、そんなにとりやすくじゃないですよ。話題が自分の方からずれたりすると難しいこともあるけど、母国語だったらそういうこともないですよ。

<留学生E>

(母語と日本語とが)今はごちゃごちゃになって。一つの言葉をいうのも何が出てくるかわからない、意識しないと。日本語でものの名前とか習った場合にはそれは中国語で何か考えなきゃいけないし、日本語が先に出る。

#### 4.2.2 クラスメート（一般学生）

日常的に同じ空間を共有する相手としてクラスメートの一般学生たちがいる。その多くは日本国籍を持つ日本人であるが、本学の場合、母語は日本語であっても国籍は日本以外の学生も含まれる。そのため、本稿では留学生に対し「一般学生」という表現を用い、クラスメートの一般学生を「クラスメート（一般学生）」と記す。

別科在籍当時はクラスメートと言えば各国の留学生たちであり、一般学生たちとはチューターやクラス・ピジターなど日本語を教えてくれる立場の相手であった。しかし、学部進学後はこのような一般学生と同じ講義を受け、彼らとは同等の「仲間」であるという意識（下線）に変化した。別科時代のように「日本語の練習相手」「日本語を教えてくれる相手」という目的を持って会い、話題を探して会話練習のための会話をするのではなく、本物のコミュニケーションを取るようになったと感じ（下線）。そのコミュニケーションが自分の日本語力を高めるサポートを果たすことを期待している。また、この「対等の存在」であると感じられること自体が、留学生たちに「日本の大学で一人の学生として



言葉や文化の違いの遜色なく勉学に励んでいる」という自分の存在の再確認の役割を果たしているのであろう。

<留学生 F>

別科の時のチューターとかやっていた人が助けてくれるっていう感じで、まあ日本語を教えてあげますって感じで受け取れたんですけど、今の友達でしたら、勉強の仲間って感じで、立場が変わってきたっていう感じです。

<留学生 C>

今は日本人学生も普通の友達。メール交換とか。日本語の練習の気持ちも少し持ってるけど、別科より少ない、かな？普通の日常生活の会話とか。座って一生懸命話題を探して話すのがちょっと大変じゃないですか、チューターは。今はそれはない。

クラスメート（一般学生）とのコミュニケーションによって大学への帰属感が増す心理的なサポートを得られることについて、次に示す留学生 C ように自分が通う大学に顔見知りのクラスメートがたくさんいること自体が授業に出る時の安心感、大学へ帰属している安心感を与えている例もある（下線）。しかし、こうした日常的な心理的なサポートは、悩みや問題解決に向けて行われるサポートに比べ、記述式調査のみでは表出されず、インタビュー調査を実施して初めて顕在化されるものが多い。「顔見知りの存在」によって得られる安心感というこの種のサポートは大学の規模という環境が要因となると予測される。例えば多くの学生を抱える大規模な大学では、互いに自然に知り合える機会が少なく、クラスメートからこのようなサポートを得にくいであろう。逆に、小規模な大学の場合、学生同士が知り合う機会も多く、欠席が続くと心配したり、されたりの関係が、自分の存在の確認といったソーシャル・サポートとなることがここでは示された。

<留学生 C>

やっぱり学部に入って友達たくさん作ったら、どんな授業に行ってもさびしくないから。私の感じでは、廊下で会っても手を振っても、あ、名前さえ覚えてないけど、なんか知り合いとか、自分がこの大学の存在、たくさん人を知ってるからいいんじゃないかなって。

クラスメート（一般学生）からは上記のサポートを受ける一方で、クラスメート（留学生）から受ける心理的なサポートが見られない。その背景には留学生という日本社会における「外国人」という立場の違いや育った社会や文化の違いから来る考え方の違いも挙げられる。今回の調査ではさらに年齢差、社会経験の差という要因が示された（下線）。しかしこの年齢差に関しては、今回調査した対象が1,2年生であったことも無視できない。特に1年生の場合、半年前までは高校生であり、そのようなクラスメート達とは年齢差以上に精神的な年齢差の開きを感じるのは当然のことである。この点については、学年によって一般学生との距離感が異なるのか、あるいはどの学年でも同様の距離感が感じられる

のか、さらに調査が必要である。

<留学生 B>

多分、年齢的のこともあるし、今、立場の問題もあるんですね。多分、留学生の気持ちはみんなそんなにわかんないです。 <中略> でもみんな留学生一緒にいるとわかる。そういう共感があるから、話しやすい感じです。

<留学生 F>

やっぱり周りの日本人学生はほとんど 18、19 くらいね。まだまだ若い、学校の学生たち。あとは、一旦、社会に出たことがあるから、またみんなと考え方が違うと思うんですね。 それで、日本人の学生は昔の日本人とちょっと違うね。若いなって。

#### 4.2.3 先輩学生（一般学生・留学生）

クラスメート以外に学内で接する学生たちに先輩学生がいる。クラスメートでは一般学生よりも留学生との距離感が近く、それぞれに対して求めているサポートの種類が異なっていた。しかしこれとは逆に、先輩学生について留学生からは情動的なサポートを得、特定の一般学生からは心理的なサポートを得ているということが見られた。

まず、先輩の留学生との関係では、日常的には接触していないがどの科目を履修すれば良いかなど必要に応じて情動的タイプのサポートを得ている様子が見られた。試験持込用の本が入手困難になることなど、先輩留学生自身が体験した失敗談から後輩へのアドバイスも含まれる。

次に、先輩の一般学生については、日常的なコミュニケーション相手の一人として位置づけられており、調査した 8 名中 6 名が日常的なコミュニケーション相手として最低 1 人は特定の一般学生の名前を調査用紙に記入していた。その人物がいずれも別科時代に知り合った本学の先輩学生であることは興味深い。現在は、留学中や社会人となっている学生もいるが、よく連絡を取っており彼らからは情緒領域の心理的サポートや指導的サポートなどを受けている。

例えば留学生 B の場合、来日直後、まだ日本語がよくわからなくて別科で日本語を勉強していたとき、同じ別科生から食堂で紹介されたのがきっかけであった。一般学生の方は中国語学科 2 年生でお互いに相手の言語を学習しているもののよく話せなかったが、それでも「何となく通じていた」と言う（下線）。現在は上海に留学中で、留学生 B がいない時でも B の実家へ遊びに行くなど親しい関係にある。この場合、お互いに言葉が通じない段階でも相手の言語を使ったり、相手の学習言語である母語を使うことでコミュニケーションを継続して行ったことがその後の信頼関係へと発展したと言える。また、留学生 D のケースも同様に D が別科で日本語を学習している頃から継続的に会っていた。時には指導的タイプのサポートをくれたり（下線）するうちに信頼関係を築いてきたと推測される。

< 留学生 B >

親しい友達は神田の学生だけど、別科の時に知り合った。彼女は中国語学科で、2人、性格は似てる。< 中略 > 今はもう4年生。今、上海に留学していて。知り合ったとき、2年生。 来たばかりか、丁度1ヶ月、2ヶ月ぐらいのとき。全然、喋れなかったとき。彼女もあんまり話せなかった。でも2人は何となく日本語しゃべったり、中国語でしゃべったりして、何となく通じてた。

< 留学生 D >

日本人なんですけど、なんか性格が似ているんですよ。話したいことは絶対言うんですよ。友達に結構なって、親しい友達になって1年半続けたんです。 日本語の勉強以外に、困ったこととか悩みがあったらいつて、アドバイスとかもらって。

ここで挙げる例でも示されるとおり、継続的な関係構築には語学力よりもお互いに興味があるか、共通の話題があるかどうかが重要のようである。次に紹介する留学生 G の発話にあるように、クラスメートの一般学生は親切ではあるが、親しくはなりにくく感じている要因に話題の展開がないことが挙げられる（下線）。それに比べ、別科在籍時代には日本語の練習のためにお互いがじっくりと時間をかけて意思を伝え合う機会があった。これはお互いに目的があったからこそ続いたものであり、結果的に大きな信頼関係へと発展し得た。しかし、日本語の日常会話が出来るようになると、お互いに歩みよりながら時間をかけて会話をする機会も少なくなり、授業以外の限られた時間に表面的な話をするようになる。そのなかで継続的に信頼関係を築いていくことは難しくなるのかもしれない。

< 留学生 G >

私は自分の性格というか明るくて積極的に働きかけていくから、向こう（日本人学生）もなんか親切に、質問とかいろいろとわからないこととかあったら、みんな優しく教えてくれるんですよ。それで、でも・・・深くなりにくいっていうか。

< 略 > 向こうは私のことを外国の人と扱うんで、こっちも、もちろんこっちは、もしね、特に中国語を勉強している人だったら、まだ中国のこと少しはわかっているんで接しやすい。で、まったく中国に対して、ちょっとね、こっちはすごく興味を持っているんだけど。最初はね、中国、何、中国どこが面白いっていろいろ聞かれるんですけど、もうちょっと深く接していくと段々、段々、興味が離れていく。

#### 4.2.4 教職員

教務課や学生課とは、別科在籍時と変化がない。特に問題がなければ訪ねて行くこともないが、逆に相談事がある時には指導的、情動的タイプのサポートを得られる場所として重要である。別科在籍時には大学からの情報やお知らせは各クラスの担任から伝えられ、特に重要事項に関して情報を聞き漏らす心配はなかった。しかし学部に入ってからはどこかのホームルームへ所属することがないため、掲示板に貼り出される情報を自分自身で確認し、能動的に情報を得る努力が必要となる。教務課、学生課をはじめ、学内の関係部署

から自らが必要とする指導的タイプのサポートや情動的タイプのサポートが受けられているか否かを測ることが学校生活への不安を軽減する役割を果たすと考えられる。従って、関係各部署から学生が得られる項目についても尺度を用いての分析対象とすることが大事である。

教員との関係も別科と学部とは異なる。別科在籍時には黙っていても教員からの情動的、指導的なサポートが与えられていた（下線、          ）。学部に入ると自分から求めていかなければそれを得ることは難しいと感じている。しかし、学内において日常的に教職員からのサポートの不足を感じているという趣旨の発言はなかった。

<留学生 D>

別科だったら担任の先生がいるからいつでも会えるし、自分が相談したいことがあったらいつでも担任の先生のところへ行けばいいし、先生が管理してくれるから心配とかなかったんですよ。でも学部に入ったら自分で自立しなければいけないし、授業も多いから週に1回しか会えない先生とかもいて、なかなかゆっくり話をする先生がいらないですね。

<留学生 A>

(別科在籍時は)何かあったらとか、すぐ先生って言ったら自分の担当の先生のところへ行って相談したりとか。ですけど、今先生ってみんなの先生、そんな感じ。何かあったら、どちらの先生に相談したらいいんだと、迷ってる。

#### 4.3 学外から受けるソーシャル・サポート

留学生の適応における、周囲の人たちとの接触や友情形成が果たす役割についてはソーシャル・スキルの観点以外にこれまでも研究が重ねられている。なかでも Bochner, McLeod and Lin (1977) の機能モデル (functional model) はよく知られる研究である。これは、米国に留学している留学生の友人ネットワークのうち、誰がどのような役割を果たしているのかをモデル化したものである。しかし一方で、この研究では分析対象とする留学生のネットワークを友人にのみに絞り、大学の教職員や学外の友人知人、親戚や家族などの多様な範囲について含まれていないとの指摘もある（例えば田中 2000 : 16 など）。今回参照した周 (1993a) では、留学生がどの範囲のネットワーク内でのサポートについて対象として回答したかについては明白にされていない。そこで本研究では前出のような学内で接触のある教職員だけでなく、学外で接触がある人物についても調査対象とした。

今回の調査協力者が学外でコミュニケーションを取る人物たちは先に挙げた母国の友人の他、アルバイト先の仲間（他大学の学生、フリーター）、アルバイト先等で接触のある社会人という3種類に分けられる。ちなみに、隣近所など地域住民とのコミュニケーションを挙げる者は一人もいなかった。これは今回の調査者が独身であることとも関係しているであろう。そして、今回のデータからは、日本社会に関する情報や就職に関する情報など学内で得られない情動的タイプ、指導的タイプのサポートを学外の、特に社会人に求める傾向が見られた。

<留学生 D>

別科の時はただ大学に入ればいいよ、という気持ちだったから、一級のためにとか、推薦試験のためにとか、そのことだけを考えたでしょう？ 今は大学卒業するんだけど、どんな仕事につくかとかも考えなきゃいけないし、そのために学校で習っているもの以外に自分で目標とか立てて、勉強しなきゃいけないんですよ。それで、学校が決めた勉強と自分が決めた勉強とを一緒にするんですよ。それはすごく大変なんですよ。でも、自分にそれがあっているかどうか分からない。

<留学生 B>

日本に来るときにはそんなに目的ははっきりしてなかった。でも今はいろいろ見ながら、勉強だけじゃなくて将来のことも考えなくちゃいけない。で、日本の社会人はみんな、経験もあると思うので、多分、経験ある人たちと話しすればいろいろ勉強になるんじゃないですか。

こうした種類のサポートには、次の背景が考えられる。留学生のなかには若者特有の未知の世界への憧れから漠然と日本へ留学したいと考え、来日する者も少なくない。とりあえず来日し、日本語学校や別科等で学部進学に必要な日本語を学習し、最長2年の在留資格の間、必死で受験勉強をする。来日してから大学進学までの間は、留学試験の高得点取得、日本語能力試験の1級合格など、到達目標が具体的で目標達成方法の情報も豊富にあった(下線)。ところが、大学進学後の学習、特に基礎的なことを学ぶ1,2年生の間には具体的な到達目標が見えにくい。次の目標である就職までの4年間をどのように過ごせば成功に導けるのか、はっきりとした道標を見つけれず、自分に必要なものは自分で探し、選び取っていかねばいけないと考える(下線)。そのため、学内のみのコミュニケーションだけでは得られそうにない指導的サポートや情動的サポートを学外の社会人の求める傾向が見られる(下線)と解釈できる。

今回の場合、学外の社会人との年齢差、性差については調査段階で言及していない。これは求めるサポートの種類によって異なることが予想される。

## 5. まとめと今後の課題

別科から学部へ進学した中国系留学生は、サポートの領域別に概観したところ、研究・学習領域でのソーシャル・サポートを緊急に必要とする状態ではなく、大学卒業後の準備を含めた将来へ向けて必要な情動的、指導的タイプのサポートを求めているという特徴が見られた。そして、サポートのタイプに注目すると、話題、境遇を共有できる留学生からの心理的タイプのサポートが目立ち、留学生の中でもさらに言葉を共有できる同国人留学生からより多くのサポートを得ている様子が認められた。この要因としては、本学の学部留学生の大半が調査対象と同じ中国系留学生であり、ますますその傾向を強めたことも考えられる。その一方で、同学年の一般学生との間には距離感を感じ、相手に対等な関係を求めつつ、言語の面では自らの言語能力を上げるために必要な存在であり、留学生同士が精

神的なつながりでのサポートを求めるのに対し、ここでは存在そのものにサポートを求めていることがわかった。しかし、個々の留学生にはそれぞれ受け入れ国の『日本人』の友人がおり、ここから精神的なつながりのサポートを得ている。しかし彼らは調査対象者より2、3歳年下であったり、社会経験を持っているわけではない。つまり、彼らが距離感を感じる同学年の一般学生と要因とされる年齢差、社会経験差において両者では差が見られないのである。逆に大きな差は「継続的な関係か否か」にあると言えよう。別科在籍時代、日本語の練習という動機の下、共通の話題があるか否かに係わらず継続的にコミュニケーションを続けてきた。そこには自らが課した半強制的な会話の場も含まれていたかもしれない。しかしその時間の流れのなかで両者がお互いを理解しあうことができ、関係が構築されたのである。留学生にしても受け入れ国の同年齢の若者と親しくなりたいという内的動機を持っていたはずである。気の合う人物を探し出したのではなく、気の合う存在になっていったのである。ところが、学部に入ると日本語の練習という動機がないため、出会いの時点でお互いの興味がなければ継続的なコミュニケーションは行われず、お互いの理解が深まる機会がないまま終わってしまうことが考えられる。

しかし、今回調査した対象は学部へ入学して半年から1年半の学生であった。例えば何か共通の目標へ向かって協力しあいながら作業をする機会があれば、同学年の一般学生との間とも距離が縮まり、心理的なサポートを期待する相手へと変化していくことも考えられる。同じ対象についての継続的な調査も必要であると考えられる。

また、調査対象を中国系留学生から他の国出身、あるいは学部留学生から別科留学生へと広げていく一方で、一般学生に対する調査も行いたい。留学生、一般学生のいずれも青年期の若者として、どのようなソーシャル・サポートを必要としているのか、あるいは既に得ているのか、量的な分析と質的な分析が必要である。

## 6. 終わりに

田中(2000)は国立大学に所属する留学生(国費留学生48.1%、私費留学生38.6%、自国政府派遣留学生12.9%)を対象にして在日外国人留学生のソーシャル・サポート・ネットワークの構造を分析した。日本人学生と留学生とのソーシャル・サポートをコミュニケーションのネットワークから分析し、国内における留学生のソーシャル・サポートには、ホスト国である日本人のソーシャル・スキルが必要であることを指摘している。今回、先行研究のソーシャル・スキルの尺度を基にして分析した結果を基に、4領域×4タイプの16項目の内容を本学の状況に合わせて見直す必要がある。その際、同じ尺度を使って、異なる出身の留学生、異なる学年、留学生のみならず一般学生との差異を分析していくことで、本学における日常レベルでのソーシャル・サポートの鳥瞰図の作成が期待される。

冒頭で紹介したように、国策としての留学生政策は一応の区切りを迎えた。しかしながら、来日してくる留学生たちはこれで終わるわけではない。受け入れた留学生、一般学生双方の目標が達せられ、より良い環境で勉学に励み、色々な意味での多様な学習が出来る場を保証するために、現在の大学が持てる環境を活かしてどう支援していくのか、これから新たな検討とその方法論が必要であると考えられる。

## 参考文献

- 浦光博 (1992) 『支えあう人と人～ソーシャル・サポートの社会心理学』セクション社会心理学 8、サイエンス社。
- 岡益巳・深田博巳(1995) 『中国人留学生と日本』白帝社。
- 木村真理子 (1997) 『文化変容ストレスとソーシャルサポート』東海大学出版社。
- 周玉慧(1992) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの送り手の分析」『広島大学教育学部紀要』第1部(心理学) 41, 61-70頁。
- 周玉慧(1993a) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの尺度作成の試み」『社会心理学研究』8(3)、235-245頁。
- 周玉慧(1993b) 「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元～必要とされるサポート、知覚されたサポート、実行されたサポートの関係～」『社会心理学研究』9(2)、105-113頁。
- 田中共子(2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版。
- ファン サウクエン・堀内みね子・徳永あかね (2004) 『留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性』神田外語大学異文化コミュニケーション研究所 共同研究プロジェクト成果報告書 研究代表：サウクエン・ファン。
- 横田雅弘・田中共子 (1992) 「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク：居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較」 『学生相談研究』13, 1-8頁。
- Bochener, S. McLeod, B.M. and Lin, A (1977) Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12(4), pp.277-294
- Caplan, G. (1974) *Support systems and community mental health*. New York: Behavioral Publications. 近藤喬一他 訳 (1979) 『地域ぐるみの精神衛生』星和書店。
- Cassel, J. (1974) Psychological processes and “stress” : Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, 4, pp.471-482.

## 資料A 調査用紙

1. 過去1ヶ月間でよく話をしたり、メールを送ったりする相手を5人挙げ、そのコミュニケーション手段を書いてください。名前はA,B,C・・・などの記号で構いません。

例) 記入例

連絡をとる相手とその関係	頻度	使うことばとコミュニケーション手段
Aさん・日本人 (バイト仲間)	週5日	バイト先で会ったとき話す(日本語) 時々、携帯メール(日本語)

Bさん・中国人 (クラスメート)	毎日	学校で会ったときや昼ごはんを一緒に食べるとき話す (中国語)
---------------------	----	-----------------------------------

連絡をとる相手とその関係	頻度	使うことばとコミュニケーション手段

2. あなたの今の生活で、次の人たちとのコミュニケーションが必要(または重要)だと感じていますか。必要だと思う順に1から順に番号を入れてください。必要だと思わない人については、番号をつけなくてもいいです。

- (        ) 母国の友人
- (        ) 同じ国出身の留学生
- (        ) 違う国出身の留学生(国名、地域\_\_\_\_\_)
- (        ) 同じ国出身の社会人
- (        ) 違う国出身の社会人
- (        ) 日本人学生



( )日本人社会人

( )その他\_\_\_\_\_

3. あなたが別科にいた時に比べ、日常的に接する周囲の人との関係に何か変化がありましたか。当てはまるものにすべてをつけてください。

別科にいた時と比べて、**新しく出会う(知り合いになる)相手の範囲**

広くなった      狭くなった      変わらない

別科にいた時と比べて、**出会った相手との関係**

長く続くようになった      あまり続かなくなった      変わらない

別科にいた時と比べて、**クラスメートとの関係**

密になった      薄くなった      変わらない

別科にいた時と比べて、**先生との関係**

密になった      薄くなった      変わらない

別科にいた時と比べて、**学校の事務関係の職員(例えば教務課、学生課など)との関係**

密になった・薄くなった・変わらない

ご協力、ありがとうございました。